

日本放送協会令和5年度業務報告書に付する総務大臣の意見

日本放送協会（以下「協会」という。）は、公共の福祉のため、あまねく日本全国において受信できるように豊かで、かつ、良い放送番組を放送する等、放送法（昭和25年法律第132号）で定められている業務を着実に遂行することを通じて、公共放送の担い手としての社会的使命を果たしていくことが求められている。

令和5年度は、令和5年10月に行われた受信料の値下げの影響により前年度決算比で受信料は減収となったものの、事業収入は予算に対して91億円の超過となった。一方、事業支出については、国際放送費の減等により51億円の減少となった結果、事業収支差金は、280億円の赤字予算に対して、136億円の赤字決算となった。業務の効率化に取り組んだ点は評価できるものであるが、今後はより精緻な収支予算の編成に努めることが望まれる。他方、「NHK経営計画（2021－2023年度）」（2023年1月修正）に沿って、構造改革や経営努力を通じた成果を国民・視聴者に還元するため、地上契約と衛星契約の双方において従前の受信料を1割以上引き下げた点は評価できるものである。今後は受信料収入と事業規模との均衡を早期に確保していくことが求められる。

本年1月に発生した令和6年能登半島地震等においては、災害時における放送の役割の重要性が再認識されたところであり、協会は、重要な公共インフラを提供する者としての使命を自覚し、引き続き将来の災害に備えることが求められる。

また、現在、ブロードバンドの普及やインターネット動画配信サービスの伸長等に伴い、国民・視聴者の視聴スタイルが大きく変化し、情報空間が放送だけでなくインターネットへと広がっている。こうしたデジタル時代において、協会は引き続き、放送コンテンツのプラットフォームとして放送番組の流通を支え、民間放送事業者との二元体制を基本とする我が国の放送全体の発展に貢献していく役割を担うとともに、メディアの多元性にも配慮しつつ、放送という手段に加え、インターネットを通じて放送番組を国民・視聴者に提供することが求められる。その際、放送法の一部を改正する法律（令和6年法律第36号）により、インターネットを通じて放送番組等の配信を行う業務が協会の必須業務となることも見据える必要がある。

こうした状況にあって、協会の在り方については、国民各層や関係者の意見も幅広く聞きながら、既存業務の見直しに聖域なく徹底的に取り組む等、事業構造改革に不断に取り組むことが求められる。「NHK経営計画 2024－2026年度」に沿って、更なる改革を進めることを期待する。

令和5年度に協会が実施した業務について、協会の令和5年度収支予算等に付した総務大臣の意見の主な項目に照らして特記すべき事項は以下のとおりである。

記

1 国内放送の充実

- 放送番組の編集に当たっては、公共放送の担い手としての社会的使命を認識し、国民の生命と財産を守る正確で迅速な報道の確保や国民・視聴者の信頼に応える質の高い番組の提供等を行うとともに、放送法を十分に踏まえ、正確かつ公正な報道を行うことにより、国民・視聴者の負託に的確に応えること。
- 令和5年5月15日に放送した「ニュースウオッチ9」において、視聴者を誤認させる不

適切な伝え方が行われ、同年12月5日に放送倫理・番組向上機構（ＢＰＯ）放送倫理検証委員会から「放送倫理違反があった」との意見が出されており、再発防止の徹底に向けた取組を引き続き着実に実施すること。

- 近年、大規模自然災害が多発しており、災害情報の迅速かつ確実な提供の重要性が高まっていることを踏まえ、大規模自然災害発生時に、国内に在住する外国人も含め、国民・視聴者に向けて、あらゆる手段できめ細かな情報提供を行うこと。その際、災害による停電時の情報入手手段としてラジオが有用であることも踏まえ、引き続き、テレビ、ラジオ及びインターネットを適切に使用すること。
- 情報空間における偽・誤情報の流通・拡散によって、権利侵害や社会的混乱が発生する等、実空間に影響を及ぼす課題が発生している現状も踏まえ、健全な民主主義の発達に資するため、正確で信頼できる社会の基本的な情報を引き続き提供すること。
- 少子高齢化や人口減少等の様々な課題に直面する地域社会への貢献や地方創生の観点から、地域の関係者と連携することにより、多様な自然・歴史・文化・人々の暮らし等、それぞれの地域ならではの魅力の紹介及び地域経済の活性化に寄与するコンテンツを充実させ、そうしたコンテンツの国内外に向けた積極的発信に一層努めること。
- 字幕放送、解説放送及び手話放送については、総務省が令和5年10月に改定した普及目標を踏まえ、拡充に努めること。特に、災害報道、国会中継及び地域放送局における字幕放送や手話放送等の一層の充実に取り組むこと。また、音声認識技術による自動字幕制作システム、生放送番組にも対応可能な新たな解説放送サービス、CGを用いた手話アニメーションの自動生成技術等、これまで実施してきた研究成果の早期の実用化や視聴覚障害者等向け放送サービスの普及に関する研究を推進すること。
- 4K8K衛星放送については、普及に向けて、引き続き、4K・8Kならではのコンテンツの制作や受信環境整備に資する取組を積極的に行うとともに、他の放送事業者、受信機メーカー等の関連団体・事業者と連携しながら、公共放送の担い手としての先導的役割を果たすこと。

2 国際放送の充実等による総合的な海外情報発信の強化

- ロシアによるウクライナ侵略やイスラエル・パレスチナ武装勢力間の衝突等の国際情勢、偽・誤情報の影響等を踏まえ、我が国の重要な政策及び国際問題に対する公的見解並びに我が国の経済・社会・地域及び文化の動向や実情を正しく伝えることがこれまで以上に重要になっている。我が国に対する正しい認識・理解・関心を培い、普及させるとともに、国際交流・親善の増進、経済交流の発展、地方創生の推進、在外邦人の安全確保、国際社会における我が国のプレゼンス向上等に資するよう国際放送のより一層の充実・強化に努めること。また、放送コンテンツの戦略的かつ積極的な海外展開等を通じ、総合的な海外情報発信の強化に努めること。
- 「NHKワールド JAPAN」については、積極的に国内外の視聴拡大を図ることが重要であり、外国で視聴されるための視点や技能を備えた優れた人材の育成・確保等を通じた効果的な実施体制の確立、多言語化も含めたニュース番組の充実、訪日外国人向けの日本語教育番組や我が国及び地域の実情・魅力を伝える番組の充実、信頼できる情報発信主体として我が国やアジアの視点で情報発信する取組の充実を図ること。
- 協会の国際放送にこのような役割が求められる中、令和6年8月19日に放送したラジオ国際放送の中国語ニュースの中で、協会の子会社が業務委託契約を結んでいた中国籍の

外部スタッフが、尖閣諸島の帰属に関する発言等、ニュース原稿にはない日本政府の公式見解とは異なる発言を行う事案が発生した。協会は同年9月10日、役職員の責任の所在と再発防止策を示し、総務省は同年9月11日付けで行政指導を行った。自らの番組基準に抵触する放送が行われたことは遺憾であり、今後このような問題が再び発生することがないように、公共放送としての社会的責任を深く認識し、放送法及び番組基準等の遵守及びその徹底はもとより、再発防止策の徹底及びその遵守状況の公表を行うこと。

3 インターネット活用業務の適切な実施

- インターネットを通じて放送番組等の配信を行う業務が協会の必須業務となることを見据え、協会は引き続き、放送コンテンツのプラットフォームとして放送番組の流通を支え、民間放送事業者との二元体制を基本とする我が国の放送全体の発展に貢献していく役割を担うとともに、メディアの多元性にも配慮しつつ、放送という手段に加え、インターネットを通じて放送番組等を国民・視聴者に提供すること。
- 地方向け番組の配信については、令和5年6月からは全ての地域の18時台のニュース・情報番組の見逃し配信を実施しているところであり、引き続き地方向け番組の配信の充実に努めるとともに、災害情報の多元的な伝達手段確保の観点から、災害報道のインターネット同時配信の充実に努めること。
- 令和5年度に有料インターネット活用業務勘定の繰越欠損金が解消したことを評価する。引き続き、協会は保有する放送番組等について、受信料を負担する国民・視聴者にとっての貴重な資産であることを踏まえ、NHKオンデマンドサービスをはじめ、多様なメディアを通じてその積極的な利活用を図ること。

4 経営改革の推進

- 協会の経営は国民・視聴者の受信料によって支えられていることから、コスト意識を持ち、業務の合理化・効率化、適正な給与水準・人員配置・人材活用・経理手続の確保、調達に係る取引の透明化・経費削減、外部制作事業者の活用等について、取組を着実かつ徹底的に進めること。特に、令和5年度末に行われた衛星波の削減については、事業支出の削減等の経営上の効果や国民・視聴者への影響等の検証・明確化を行い、結果についての説明責任を果たすこと。また、子会社等との間で高止まりしている「随意契約比率」を引き下げることにより、より競争性の高い調達を実現することや、情報公開等による透明性の向上についても一層の取組を進めること。さらに、協会内外においてコンテンツ制作に係る人材を確保するため適切な対価の設定等に努めるほか、基幹放送普及計画（昭和63年郵政省告示第660号）に基づき、「NHK BS」及び「NHK BSプレミアム4K」で外部制作事業者の活用に努めるとともに、「放送コンテンツの製作取引適正化に関するガイドライン」に従って、特に価格交渉や価格転嫁について、積極的に協議・相談に応じる等、適正な製作取引の確保に努めるとともに、適正な製作環境の確保にも努めること。
- 「日本放送協会の子会社等の事業運営の在り方に関するガイドライン」等に基づき、子会社に適切に配当を行わせるよう徹底すること等により、利益剰余金が協会に適切に還元されるよう努めること。
- 子会社・関連会社を含む「グループ経営」については、令和4年12月に設立した「株式会社NHKメディアホールディングス」、令和5年4月に関連公益法人等を統合した「NHK財団」の効果のほか、子会社・関連会社が実施している業務の適正性や保有する資産の効

率性について随時検証を行い、必要な見直しを行うこと。

- 令和4年12月の協会における稟議で、衛星放送番組のインターネット活用業務に係る設備調達に関し、違法性が疑われる支出は認められなかったものの、令和5年度収支予算・事業計画との関係で明確な説明が行われぬまま手続が進められていた事案が明らかになった。また、令和5年12月には、報道局職員による、飲食を伴う取材活動の経費の申請に関する不正請求が認定された。こうした事案は、受信料収入によって成り立つ協会に対する国民・視聴者の信頼を著しく損なうものである。こうした事案を踏まえ、引き続き、経営委員会及び監査委員会並びに執行部がそれぞれの職責を果たし、ガバナンスの強化とコンプライアンスの徹底に組織を挙げて全力で取り組むとともに、放送法に基づきNHKグループの業務の適正を確保するための体制整備を適切に図ること等によりNHKグループ全体のコンプライアンスを確保・徹底すること。
- 映像伝送等の技術の研究開発を行い、その成果をスタートアップ等を含め広く社会に還元すること。
- 平成25年7月に首都圏放送センターの記者が長時間労働による過労で亡くなられたことを受けて、業務の体制や進め方、勤務制度の見直しを行っていたにもかかわらず、令和元年10月に管理職の職員が亡くなられ、再び労災認定を受ける事態となったこと等を重く受け止め、これまでの健康確保の施策を再点検した上で、再発防止を徹底すること。また、協会が自ら定めた「NHKグループ 働き方改革宣言」について、経営委員会、監査委員会、執行部がそれぞれの役割を適切に果たしながら推進できるよう、ガバナンスの点検・強化に真摯に取り組むこと。
- 女性職員の採用及び役員（経営委員を除く。）・管理職への登用を積極的に拡大すること。また、ワークライフバランスに関する取組の一層の充実、女性の活躍に関する情報の積極的な公表等、協会が自ら定めた「日本放送協会 女性活躍推進法に基づく一般事業主行動計画」に記載した目標の達成に向けた取組を確実に実施し、また、これに加え、女性の活躍に向けた取組を更に加速させること。
- 放送法に基づき、中期経営計画、経営委員会及び理事会の議事録等協会の組織、業務及び財務に関する基礎的な情報等の情報公開を一層推進することにより、運営の透明性の向上を図り、自ら説明責任を適切に果たしていくこと。
- 協会と民間放送の二元体制の下で、地域においても、多様な放送番組を視聴できる環境を維持するため、放送ネットワークの維持・管理に関する民間放送事業者との連携・協力について、放送法及び電波法の一部を改正する法律（令和5年法律第40号）により、地上波の中継局について民間放送事業者等との共同利用が可能となったことも踏まえ、放送全体のプラットフォームとして、ネットワーク効率化に向けた取組を着実に実施していくこと。

5 受信料の公平負担の徹底に向けた取組等

- 受信料支払率は令和5年度末には78.6%であった。未契約者及び未払者対策について、協会は、デジタル・書面・電話等による効率的な契約・収納活動を進めるとしているところ、受信料の適正かつ公平な負担の徹底に向け、営業活動の合理化・適正化を図りつつ、支払率向上のため、民事手続及び割増金制度の適切な活用を含め、より一層の取組を進めること。特に、これらの新たな営業活動については、契約・収納活動の効率化と公平負担の徹底の双方の観点から効果の検証を行い、今後の営業活動に反映させること。
- 受信契約の勧奨等に際しては、平成29年12月の最高裁判所の判決も踏まえ、公共放送

の役割や受信料制度の意義も含めてこれまで以上に丁寧な説明を行い、受信契約の締結や受信料の支払に国民・視聴者の理解が得られるよう努めること。

- 国民生活センター及びNHKふれあいセンターに寄せられた意見等も踏まえ、引き続き、受信契約の勧奨等の業務の適正を確保するための体制や案内方法等について、不断に点検及び見直しを行うこと。

6 大規模災害からの復旧・復興への貢献と公共放送の機能の強靱化等

- 各地の記録的大雨や地震等の災害時において、迅速かつ正確な報道に努め、特設ニュースを編成する等の地域向けニュースを放送し、文字情報で生活関連情報を提供したことを評価する。とりわけ、令和6年能登半島地震において、BS103チャンネルを活用し、NHK金沢放送局の放送を行った点を評価する。
- 災害時には、放送が被災者をはじめとした国民・視聴者にとって特に重要な情報源となることに留意し、政府・地方公共団体等の関係機関や民間放送事業者等と連携しつつ、放送が途絶することのないよう、停電対策を含め放送設備の維持・復旧に取り組むとともに、迅速かつ正確な報道を行うこと。また、避難所等における受信設備設置等の視聴環境整備の支援や様々な伝送路による情報の提供等、被災者に対する情報伝達手段の確保に引き続き努めること。
- 災害時には、特にSNS等による偽・誤情報の流通・拡散も想定されることから、放送等を通じて偽・誤情報への注意喚起を国民・視聴者に引き続き呼びかけること。
- 災害からの復旧・復興の観点から、国内放送のみならず、国際放送によるニュースや番組の充実等を通じて、被災地の取組を支援すること。
- 緊急報道対応設備の整備等を通じて、引き続き、首都直下地震や南海トラフ地震等の大規模災害に備えた公共放送の機能の強靱化を図ること。
- サイバーセキュリティ基本法（平成26年法律第104号）に定める重要社会基盤事業者として、引き続き、サイバーセキュリティの確保に万全を期すこと。
- 偽・誤情報対策に係る技術開発等に努めること。

7 放送センター建替え等

- 放送センターの建替えについては、引き続き、建替えの経費が受信料により賄われることを十分認識し、「基本計画」の合理性・妥当性等、国民・視聴者の理解が得られるよう、説明を尽くすとともに、既存業務の見直し等を踏まえつつ、事業規模について不断に精査を行い、建替えの内容や工期等の見直し等を早期に具体化すること。その際、新放送センター及び各地の地域放送会館その他全般にわたり、建設費の圧縮に徹底的に取り組み、その成果を国民・視聴者に還元すること。
- 地方からの情報発信、地方創生への貢献の観点から、あるいは、災害時のバックアップ機能の充実の観点から、引き続き、公共放送の機能の地方分散に取り組むこと。